

土木作業で松の木が切られ、附近の土地が踏みじられたために生えなくなってしまうたのである。

その後、終戦の前年の秋、久部の山に砲台を築くために登った海軍の兵隊が、山の松林でマツタケの群生を見つげ、手に持ちきれずに上衣に包んで持ち帰ったという話を聞いた。

その場所はわからぬながら、胸のわくわくするような話であった。

かつて久部には、篠崎公園の他にも、人に知られることもないままに、マツタケが年々生え継いできた松林があったのであろう。

時代の変遷とともに山林の手入れをする人も無くなり、松林も戦後のマツクイ虫で大方は枯れてしまった久部の里から、本当にマツタケはもう消えてしまったのだろうか。

僅かに残る赤松の木を見るにつけ、どこかにまだ生え継いでいるような気がして、ひとりひそかに夢を抱くのである。

表紙解説

医王山長楽寺（本匠村大字上津川）は一名井ノ内薬師ともいわれ、大同三年（八〇六）の創建とされるが、江戸時代の初期にはひどく荒廃していた。一説には切支丹大名宗麟に焼かれたともいわれる。

やがて享保の中期に入り、この寺に参詣した六代藩主高慶の意により、瑞祥寺（同村大字因尾）末庵として寺堂の造修が進められ、それ以来、藩主・領民の篤い信仰を受けるようになった。戦後になり堂主が去るなどして一時その衰退が心配されたが、最近地元住民の努力により新しく堂宇が整備され、再び参拝者の数が増えている。

表紙の写真は、この寺のご本尊薬師如来像である。木造で、高さは六〇センチばかり、衣文にやや繁雑な手法が見られ、全体に鋭く、都ぶりの明らかな作風を示す。製作年代は江戸時代中期頃。「岩男順——宇佐歴史民俗資料館」といわれている。この仏像の珍しい点は、内部がくりぬかれ、その中に別の仏像（胎内仏）を蔵していることである。（別掲写真）

なお、このほかに中品上生印の阿弥陀如来像、不動明王立像、毘沙門天立像、弘法大師座像などがあるが、いずれも江戸末期の地方的で素朴な作風が非常に印象的である。

解説 矢野 徳弥